



北方民族博物館だより

No.70



H2.216 トナカイ荷駄用鞍^{くら}
サミ フィンランド/イナリ
鞍長さ48.0cm 全幅23.0cm

かつてのトナカイ放牧では新たな放牧地を求めて、日常的に移動生活が行われていた。移動に伴うテントや日常生活用具の運搬に、冬は橇^{そり}を利用し、雪のない季節にはトナカイの背で運んだ。トナカイに荷物をつけるために荷駄用鞍^{くら}が使われ、日常的な移動生活の知恵から生まれてきた荷駄用の籠^{かご}や箱、ゆりかご等が使われてきた。

- 1 表紙 トナカイ荷駄用鞍
- 2 ロビー展「大昔の大きな動物」／講座「地球温暖化とマンモス絶滅」
- 3 特別展「トーテムの物語」
- 6 INFORMATION

ロビー展

『大昔の大きな動物：
サハのマンモスを知ろう』

2008.4.26～6.25

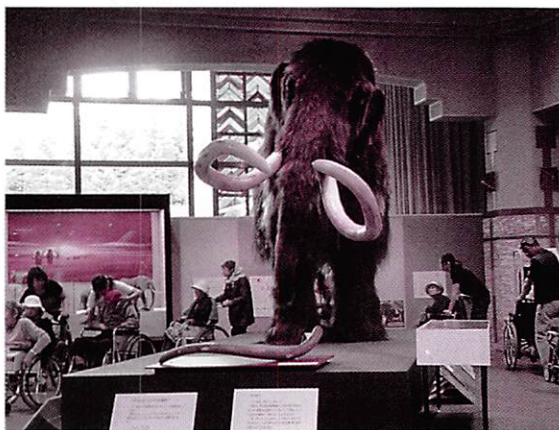
当館では、2007年11月よりロビーでマンモス模型の展示を始めました。本ロビー展は、マンモスを中心に寒冷地に適応した大昔の動物たちをもっと知ってもらおうことを目的に開催しました。

一口に「マンモス」といっても、生息地や生息時期はさまざまです。当館のマンモス模型は「ケナガマンモス」という種類で、およそ40万年前から1万年前まで生息していたと考えられています。その他にはヨーロッパにヨーロッパマンモス（250万年～75万年前）、シベリア西部にステップマンモス（75万年～40万年前）、アメリカ大陸にコロンビアンマンモス（250万年～1万年前）等が生息していました。ケナガマンモスは、世界で最も寒いとされるシベリア東部から北アメリカにかけて生息しており、最も寒冷な地に適応したマンモスといえます。

これらのマンモス類の中で、その姿形が最もよくわかっているのはケナガマンモスです。シベリアの永久凍土内で見つかる遺体は、骨だけではなく、毛や内臓なども冷凍保存されています。ほぼ全身の骨が見つかったマンモスには名前が付けられることがあります。当館のマンモス模型の元になったマンモスは、発見場所付近の川の名前にちなんでチレフチャフ・マンモスと名付けられています。

ケナガマンモスが、なぜ絶滅してしまったのかについてはいくつか考え方があります。地球の温暖化、人間による過剰な狩猟、あるいは病気などが主な原因とされていますが、はっきりしたことはまだわかっていません。近年、ロシアやフランス、日本の研究者間でマンモスへの関心が高まっています。

(学芸グループ 角達之助)



講座

『地球温暖化とマンモス絶滅』

2008.6.10

講師 福田正己氏（アラスカ大学教授）



ロビー展の関連事業として、アラスカ大学の福田正己氏をお招きし、講演いただきました。

福田氏は、北方地域の気候変化やそのメカニズムを調査する中で、およそ1万年前に絶滅したマンモスにも関心を持つようになったそうです。

最初に、マンモスが生息していた頃のシベリアの環境についてお話がありました。当時は今より寒かった時期ですが、気温は不安定で、寒い時期と比較的温暖な時期が交互に訪れていました。この変化によってマンモスの餌となる植物の分布範囲が縮小・拡大し、それに伴ってマンモスの活動範囲が変化したといえます。そしておよそ1万年前、それまでゆるやかに変化していた温度が急激に上昇して降雪量が増え、草が雪に覆われて、餌が得られなくなったことがマンモス絶滅の一因ではないかと紹介されました。

次に、森林火災等によって二酸化炭素が増加した結果、現在地球規模で気温が上昇し、北方地域では海氷や永久凍土が解け続けているという報告がありました。森林の火災は、樹木の生長を促す作用もあり、悪影響ばかりではないが、人為的な過度の火災は自然を破壊し、地球温暖化をもたらすと警告されました。

地球温暖化は常に人間が引き起こしているわけではなく、自然現象の場合もあるといえます。しかし温暖化がマンモス絶滅の一因であったことを考えあわせると、私たち人間には、人間を含む地球上のすべての生物のために、温暖化を防ぐ努力が必要だと強調されました。

福田氏による講座は、小学校でも行い、児童達にもわかりやすくマンモスや環境問題についてお話されました。

どの講座でも多くの質問が寄せられ、かつて生息していたマンモスを通して、現在の環境を考えるよい機会にもなったようです。

(学芸グループ 角達之助)

環北太平洋の文化Ⅲ第23回特別展

『トーテムの物語 ～ 北西海岸インディアンのくらしと美』

2008.7.19～10.19

環北太平洋の文化を時計回りに取り上げてゆく企画の第3回目は、アラスカ州南部からカナダ・ブリティッシュ・コロンビア州、ワシントン州・オレゴン州あたりまでの地域にくらしてきた北西海岸インディアンの文化に焦点をあてました。生業、社会・儀礼、そして芸術について、国立民族学博物館（大阪府吹田市）と当館収蔵の実物資料に、映像をまじえて紹介しています。以下に展示の概要と関連行事について報告します。



テープカットの様子

はじめに

北西海岸インディアンはNorthwest Coast Indiansの訳であり、いくつもの民族集団の総称です。これらの民族は言語学的にも異なる起源を持つことがわかっていますが、その文化には共通点が多く、まとまった領域としてとらえられています。また、民族名は、独特の発音を伴うものも多く、ローマ字綴りが統一されておらず、日本語のカタカナ表記も定まっていません。展示および関係する印刷物や本紙では、当館で便宜的に定めた表記を使用しています。

伝統的なくらし

この地域は高緯度にありながら、比較的温暖で雨が多く、サケをはじめとする水産資源とヒノキ科の針葉樹などの森林資源に恵まれています。これらの資源をもとに、人びとは定住的な生活を営み、階層社会を築いていました。



最初のコーナーでは、自然や歴史についてパネルで概説したほか、漁撈具、カヌーや櫂、食器、調理具、かご製品などとともに、人形や家屋の模型、生業の様子を描いた版画等を展示しました。また、1940年代から90年代に撮影された生業の様子などと、2001年に撮影されたカヌー復元の映像も上映しました。

社会・儀礼と芸術

北西海岸インディアン文化のなかでも、よく知られているのがトーテムポールです。トーテムとは、祖先と特別な関わりをもつと信じられている特定の動植物や自然現象のことで、ワシ、ワタリガラス、クマ、オオカミ、シャチなど実在の動物が多く含まれています。これらトーテムはそれぞれに物語が伝えられており、その形態的特徴をとらえた独特のデザインで、集団の紋章などとして、家屋や儀礼具等に表現されてきました。

展示では、儀礼具を中心に、衣装や楽器など手の込んだ彫刻や意匠が施されたものを陳列しました。



さらに、北西海岸の人びとの世界観では、すべての動物は実際には人間と変わらぬ存在で、それぞれの種に応じたさまざまな超自然の力を持っており、動物たちは人間の形態をとることができると考えられていました。仮面はそれを表現しており、特に嘴を開くと中に人間が描かれるなど、一つの仮面でいく通りかに変身するものは、特に観覧者の目を引いていたようです。

また、18世紀以降のヨーロッパ人との交易の影響を示す工芸品や、版画等も展示しました。

シルクスクリーン版画と現代の文化

他の北方地域と同様に、19世紀から20世紀初頭には移住者が増え、先住民はそれまでの生業を基盤とする暮らしが困難になり、市場経済に組み込まれていきました。北西海岸インディアンの間で、はしかや天然痘などの伝染病により人口も減少し、キリスト教の布教や学校教育等により、伝統的な文化は次第に衰退していきました。

しかし、1960年代ころから先住民の権利を回復する運動が盛んになり、伝統文化の復興もおこってきました。カナダでは、北西海岸インディアンの彫刻家らが原画を描き、シルクスクリーンという技法の版画を量産して販売することが始まりました。版画は比較的安価なこともあり、個人の収集家や美術館・博物館等に受け入れられ、北西海岸インディアンの美術の普及に大きな役割を果たしたと考えられます。現在は、アメリカ本土やアラスカの彫刻家たちも版画を作成しており、画廊をはじめ、インターネット等でも販売されています。展示では、46点の版画をモチーフ別に並べ、そこに描かれた内容についての簡単な説明を付けました。また、関連する映像も上映しました。



彫刻家をはじめ、北西海岸インディアンのなかにはアーティストとして活躍する人も増えています。作品は、アクセサリー類からトーテムポールまで大きささまざまなものがあり、空港などの公共の空間のデザインを担う人も出てきています。それらについても、実物資料や写真で紹介をしました。

さらに、筆者が10年前に調査を始め、情報収集を続け

てきたアラスカ州南部のメトラカトラという保留地の状況を紹介します。そこで活動を続けているアーティストの作品も展示しました。

アメリカ、カナダという国の中でくらす北西海岸インディアンの状況を知っていただきたく、関係する法律や、博物館と先住民との関わりについてもパネルで触れました。



今回は網走市立美術館を会場に「～版の世界～ 所蔵作品と北西海岸インディアンの版画」展を、当館との共催で行いました。市立美術館所蔵品のうち技法の異なる3種の版画（凸版、凹版、平版）とともに、孔版の1種であるシルクスクリーンによる作品として、国立民族学博物館の北西海岸インディアンの資料44点も展示しました。当館と相互の観覧料の割引も行い、二つの展覧会を見ていただくことで、北西海岸インディアンの芸術についてより深く知っていただくことができたのではないかと考えています。

本特別展は、下記の機関・個人をはじめ多くの方々の協力をいただき、開催することができました。記して感謝申し上げます。

国立民族学博物館、野外民族博物館リトルワールド、網走市立美術館、渥美一弥氏、大村敬一氏、立川陽仁氏、山田亨氏、八木清氏、岸上伸啓氏、小谷凱宣氏、ジャック・ハドソン氏、ノーマン・ジャクソン氏、ジャクソン澁谷祐子氏、ウェイン・プライス氏、リンダレ・シーラー氏、ピンセント・リッカード氏

また、特別展に関連した次の行事を行いました。

■講習会「北西海岸インディアンの仮面をつくろう」

特別展初日には、版画家の田主誠氏を講師に、ペーパークラフトで仮面作りに挑戦しました。モデルになった仮面は、ヌートカのオオカミの仮面で、ヘルメットのように頭にかぶるタイプのもので、田主氏が厚紙に版画で型を刷って用意してくださり、それを切ってボンドで貼って組み立て、アクリル絵の具で色をつけました。立体的にするため、細かいパーツに分かれており、組み立てだけでも2時間以上かかり、色を塗って仕上げるまでに3時間を要しました。

田主氏は20人の子どもと9人の保護者らの作品を、一つ一つ講評していただき、受講証を手渡されました。

最後に、参加者全員で仮面をつけて記念写真も撮りました。低学年の子どもたちも、「つかれた」と言いながらも、最後まであきらめずに完成させました。



■公開研究会「北西海岸インディアンのアート」

7月20日には、国立民族学博物館共同研究の公開研究会を行ないました。この研究会は、平成19年度に採択された研究課題「カナダにおける先住民芸術の歴史的展開と知的所有権問題—国立民族学博物館所蔵の北西海岸インディアンとイヌイットの版画の整理と分析を通して—」（筆者代表）で、研究員からは版画を含む北西海岸インディアンの芸術についてのお話をいただきました。発表者および題名は次のとおりです。

- ・大村敬一氏「不可解なるものの力と人類の潜在的可能性
北西海岸インディアンの美術の歴史にみる人類学と博物館の未来」
- ・立川陽仁氏「北西海岸先住民社会におけるアーティストの社会的位置づけについて —バンクーバー島、キャンベル・リバーの例から—」

・益子待也氏『紋章』から『美術』へ —南東アラスカのトリングットにおける使者祭宴と『美術』—
共同研究のメンバー以外に、市民や当館職員も加わり、30名を超える研究会となりました。内容も特別展の内容をより深く理解できるものだったと思います。

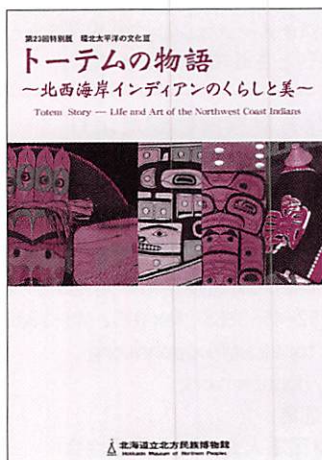
■講習会「版画を刷ってみよう」

8月9日（土）には、網走市立美術館学芸員の古道谷朝生氏を講師に、シルクスクリーンの版を作成し、実際に刷ってみるという、小中学生向けの講習会を開催しました。

はさみで切ることのできるデザインを用意し、参加者一人一人が型紙をつくり、それをアイロンで布につけ、インクで画用紙に刷りました。また、展示に利用した版画用マットの余りで額をつくり、飾れるようにしました。夏休みの作品にしたいという参加者もいて、とても好評でした。

このほか、7月19日と8月9日に展示解説、7月26日に博物館クラブ「ミニチュアのトーテムポールをつくろう」、8月2日に「学芸員講座・曲げ木風の小物入れをつくろう」を開催しました（講師はいずれも当館職員）。

（学芸グループ 齋藤玲子）



第23回特別展図録 環北太平洋の文化Ⅲ トーテムの物語 ～北西海岸インディアンの くらしと美～

平成20(2008)年7月18日発行
A4判 全59頁

「北西海岸インディアンのくらしと物質文化」コラム「メトラカトラのアラスカ・ツィムシャン」（齋藤玲子）

「アーティストの社会的地位と政治カーキャンベル・リバーのクワクワカワクウの例から—」（立川陽仁）

『伝統』継承の場としての学校—北西海岸先住民サーニッチの学校が意味するもの—」（渥美一弥）

「北西海岸の先住民自治と文化振興：自治権獲得後の民族文化振興政策の一考察」（山田亨）

「不可解なるものの力：北西海岸インディアンの美術をめぐる苦悶と希望」（大村敬一）

図版、展示資料一覧、文献一覧

第23回北方民族文化シンポジウム

テーマ

「北方地域の博物館と民族文化③」

日時：10月18日[土]、19日[日]

会場：オホーツク・文化交流センター
(エコーセンター2000)

「現代の文化」「伝える」をキーワードに、国内外の博物館関係者・民族文化伝承者・教育関係者・研究者等による、博物館活動や関連機関との連携による事例発表や討論を行います。

博物館はいかに、民族文化の保存や伝承・普及・啓発に寄与できるのか、多様な例をとおして考えます。

発表者(発表順)

L.ミソノヴァ(ロシア科学アカデミー)

謝黎(放送大学)

S.カーリー(アラスカ州立博物館)

池田貴夫(北海道開拓記念館)

齋藤玲子(当館)

出利葉浩司(北海道開拓記念館)

高橋規(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)

J.ベアード(プリティッシュ・コロンビア大学人類学博物館)

北原次郎太(財団法人アイヌ民族博物館)



シンポジウム関連事業
「地球交響曲第三番」上映会
10月11日[土]午後1時30分～
オホーツク・文化交流センター

INFORMATION

行事報告

◆4月27日[日]に「マンモス写生会」を開催し、作品を「みんなが描いたマンモス展」で展示しました。入賞者は次のみなさんです。

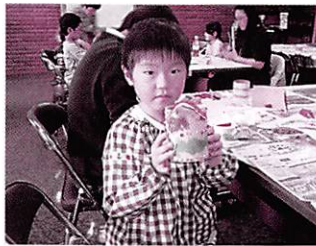
- ・館長賞 高橋悠真さん
- ・アート賞 杉山雄朗さん
- ・解説員賞 市橋菜香さん
- ・ミュージアム賞 谷脇進太郎さん
- ・ナイスアングルで賞 中野冬雪さん
- ・マンモス賞 黒川姫那さん
- ・学芸員賞 松田翔さん



◆5月3日[土]に「ロビー展大昔の大きな動物 解説会」(案内：角達之助学芸員)を行いました。

◆6月7日[土]に学芸員講座②「サハ共和国の自然とマンモス」(講師：角達之助学芸員)を開催しました。

◆6月21日[土]に、はくぶつかんクラブ「革でつくるペンスタンド」(講師：菅原章子解説員)を開催しました。



◆7月12日[土]に、学芸員講座③「カムチャツカ先住民の料理体験：サケのハンバーグづくり」(講師：渡部裕学芸員)を開催しました。

◆7月26日[土]に、はくぶつかんクラブ「ミニチュアのトーテムポールをつくろう」(講師：中尾亜未解説員)を開催しました。



調査報告

◆6月26日～7月13日の日程で、網走市能取岬西岸遺跡(オホーツク文化期)の発掘を行いました。(担当：角達之助学芸員)

◆7月28日～8月19日の日程で、カムチャツカ先住民に関する調査を行いました。(担当：渡部裕学芸員)

OMI オホーツク・ミュージアム・インフォメーション

◆長らくご愛顧をいただきました、OMI(オホーツク・ミュージアム・インフォメーション)は第49号をもって終刊とさせていただきます。

北方民族博物館だより
No. 70

平成20(2008)年9月30日発行
編集・発行 北海道立北方民族博物館
〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1
電話 0152-45-3888 fax 0152-45-3889
e-mail: tonakai@hoppohm.org
http://hoppohm.org

指定管理者

財団法人北方文化振興協会